

中国の風水思想と洞天福地

大形 徹（大阪府立大学）

はじめに

一、中国の風水思想

二、洞天福地

三、齊雲山の洞天福地と風水

四、風水と洞天福地をつなぐもの

おわりに

はじめに

発表者は、中国の神仙思想や道教をおもな研究対象とするが、2009 年から、専修大学の土屋昌明教授の科研「中国道教における山岳信仰と宗教施設のネットワークに関する総合的調査と研究」2009 年度～2011 年度 基盤研究(B)に参加し、さらに 2012 年から継続する形ではじまった土屋昌明「中国道教の地理的イメージと宗教的ネットワークに関する総合的調査と研究」2012 年度～2014 年度 基盤研究(B)に参加し、現地調査を行った。

その間、発表者自身が訪れた中国の山岳は、赤城山（十大洞天）・括蒼山（十大洞天）・蓋竹山（七十二福地）・委羽山（十大洞天）（浙江省 2009.9）・中岳嵩山（三十六小洞天）（河南省 2011.8）・西岳華山（三十六小洞天）・終南山（陝西省 2011.8）・東岳泰山（三十六小洞天）（山東省 2012.8）・王屋山（十大洞天）（河南省 2012.8）・南岳衡山（三十六小洞天）（湖南省 2013.8）・羅浮山¹（十大洞天）（広東省 2013.8）・齊雲山（安徽省 2014.11）・龍虎山（七十二福地）（江西省 2014.11）である。

これらは、洞天福地の観点から調査を行った。洞天福地とは、中国の道教において構想された聖地であり、多くは洞窟を有する。理念上は、それらの洞窟は地下でネットワークを有し、それぞれつながっているイメージがある²。実際にはもちろん、そのようなことはない。十大洞天・三十六小洞天・七十二福地があり、整然と区別されている。洞天は六朝時代に端を発し、唐代に司馬承禎と杜光庭によって整理され、現在の体系となった。

調査の場所では、多くの道士や道教関係者と話をしたが、彼らとの会話の中で風水という言葉が、何度かあらわれた。道観の立地条件として、また修行の場所として、風水が良い場所が選ばれるようであった。浙江省の道観では修行の場として洞窟の入り口の開けた場所が選ばれていた。そこで道士たちは座禅のような修行を行っていた。そこはまたかつては煉丹の場所でもあったと聞いた。仙人に

1 『抱朴子』の作者、葛洪が修行した場所。

2 参考文献「増補仙穴考」参照。

なる薬である煉丹は、水銀などを含む鉱物質の薬物を丹炉という炉に入れ、調合して作られるが、やはり、気が流れて集まる場所がよいとされたのである。

一、中国の風水思想

・中国

「風水」は、白川静の『字通³』によれば「風と水。地相」であり、ごく簡単には、地相ということになる。「風水」という言葉は晋の郭璞（276・324）の撰とされる『葬書⁴』の中にみえる。

葬は生氣に乗ずるなり。五氣、地中に行り、發して萬物を生ず。人、體を父母より受け、本骸、氣を得、遺體、廕を受く。經に曰く、氣感じて應じ、鬼福、人に及ぶ。是を以て銅山、西に崩れ、靈鐘、東に應ず。木、春に華さき、栗、室に芽ぶく。蓋し生なる者は氣の聚まりて、凝結する者は骨と成り、死して獨り留まる、故に葬なる者は氣を反して骨に入れ、廕を以て生ぜしめんとする所の法なり。丘壠の骨、岡阜の支^{えだわかれ}は、氣の隨う所。經に曰く、氣、風に乗ずれば則ち散じ、水に界^{へだ}てらるれば則ち止む。古人、之れを聚めて散ぜざらしめ、之れを行らし止まることが有らしむれば、故に之れを風水と謂う。風水の法、水を得るを上と為し、風を藏するは之れに次ぐ。…⁵

『葬書』という書物は、死者（祖先）の骨に気が入り、それがまた子孫に影響を与えるという、不思議な理論となっている。「人、體を父母より受く」というのは、『孝經』の「身體髮膚、之れを父母に浮く、敢えて毀傷せざるは、孝の始めなり。⁶」にもとづくことは明かである。しかしながら、この場合の「孝」は生きている人のことを述べており、ここの風水説のように、死者（祖先）の骨を媒介にして、子孫がよい氣を得るといったものではない。

3 『字通』電子版、平凡社、風水。

4 欽定四庫全書『葬書』晋、郭璞撰。『四庫提要』によれば、「…其〔郭璞〕の嘗て葬書を著わすを言わず、唐末に葬書地脈經一卷、葬書五陰一卷有り、又た璞の所作りし所為るを言わず、惟だ宋志のみ載せて璞の葬書一卷有り。是れ其の書、自宋自り始めて出で、其の後ち方技の家、競いて相い粉飾し、遂に二十篇の多き有り（不言其嘗著葬書、唐末有葬書地脈經一卷、葬書五陰一卷、又不言為璞所作、惟宋志載有璞葬書一卷。是其書自宋始出、其後方技之家、競相粉飾、遂有二十篇之多）。これによれば郭璞が実際に『葬書』をあらわしたとは考えにくく、どうも宋あたりに、郭璞に仮託して作られた書物のようである。「傳郭璞『葬書』の成立と變容」宮崎順子著。… 日本中国学会報 58, 2006.に詳しい。

5 葬者乘生氣也。五氣行乎地中、發而生乎萬物。人受體於父母、本骸得氣、遺體受廕。經曰氣感而應、鬼福及人。是以銅山西崩、靈鐘東應。木華於春、栗芽於室。蓋生者氣之聚、凝結者成骨、死而獨留、故葬者反氣入骨、以廕所生之法也。丘壠之骨、岡阜之支、氣之所隨。經曰、氣乘風則散、界水則止。古人聚之使不散、行之使有止、故謂之風水。風水之法得水為上、藏風次之。…。

6 身體髮膚、受之父母、不敢毀傷、孝之始也。『孝經』開宗明義章。

清の朱亦棟『羣書札記⁷』は、

葬書に云う、風に乗れば則ち行^{めぐ}り、水に界^{へだ}てらるれば則ち止む、此れ風水の二字の由りて始まる所なり。按ずるに、易の大過、巽下兌上、巽は風なり、兌は澤水なり。風水の義、蓋し諸を此に取る⁸。

という。「風水」の語が、『葬書』のこの部分からきているということ、それはまた、儒教の經典である『易経』の風と水の部分にもとづくという。そしてまた朱亦棟のころ、「風水」という言い方が一般的であったことがわかる。

日本における風水研究の草分けともいえる牧尾良海氏の『風水思想論考』（1994）の序文にこうある。

《風水》という一つの思想体系は、仏教という言葉の博大な流通に比較すれば、まことに渺たるものであり、その内容がどんなものであるか、関心を持っている人もきわめて少ないであろう。小さい辞典ではこの単語も載っていないくらいである。しかしこの風水の思想は、中国では遠い古代の戦国時代から秦代にかけてその源を発しており、魏晉南北朝の時代に光大となり、爾来、千数百年間を通じての中国の思想や文化に並々ならぬ影響を与えたものである。一方、この風水思想は、唐代に朝鮮半島の新羅朝に伝えられてその土壤を暴君的に支配し、やがてこれがまた朝鮮半島と大陸との双方から相ついで日本にも伝来せられて、日本文化の各方面にわたって少なからざる影響を与えたといえることができる。

『風水思想論考』（1994）は、牧尾氏が、『風水：地霊人傑の思想』（デ・ホロート原著；牧尾良海訳・註。… 大正大学出版部, 1977.）を出版してから、20 年になろうとしているころのものであるが、この時点でも、まだ「風水」の認知度は、低かったといえる。

風水は、中国から朝鮮半島に伝わり、日本にも伝来しているという。風水の定義については、以下のように述べられている。

ともあれ以上の字解が示しているように、風水という語は一つの総名であり、生者のための都城や居宅に係わる術と死者の墳墓に係わる術との二方面が含まれているのであって、通例前者を《陽宅(陽基)風水》と呼び、後者を《陰宅風水》と呼んで区別している。しかし双方ともに根

7 16 卷 朱亦棟學；及門諸子校字、竹簡齋 光緒 4 [1878]。

8 葬書云、乘風則行、界水則止、此風水二字所由始也。按、易之大過、巽下兌上、巽風也、兌、澤水也。風水之義、蓋取諸此。

本的な原理は同一というべきである。⁹

総名としての風水に一応の定義を与えるとすれば、次のように言えるであろう。

“人が都城や寺院・居宅・墳墓などを構築するに当って、予定地点の環境を形成している大地自然の形勢や方位、流泉の有無及びその態様、地表下の精気（竜脈）の優劣吉凶、全局面における陰陽調和の程度等を観察判断し、能うかぎりの各種の好条件を具えた勝境を求める理論と方法をふくむ思想の一体系。”¹⁰

山田利明氏は、風水説の原形として「気」の存在を考え、その展開の上に、風水が成り立っていると考えている。

宇宙に充ちたこの気は、地上のあらゆる存在の根元であり、生命の源でもある。つまり、人を作る気も、山水を作る気も同じ気にほかならない。同様に、人の身体に気が流れるように、大地の中にも気が貫流している、という自然観が現われる。おそらく漢代頃には、こうした思想はかなり整理されていたと考えられる。それは、例えば導引法の存在や、気論の存在などからも推測し得るところである。こうした思想あるいは技術の中から、後に堪輿・風水と称される地相術が発達する。この地相術の原形は墓地の選定に関わり、祖先が死後も快適で安楽な生活を営める土地の択占法であり、祖先が地下で快適に過ごし得ることによって、子孫が余慶を受けて家門の繁栄に至るというもの。陰湿な地よりは温暖で適度の乾地、要するに生きる人間にとっても快い地が適地とされた。そこに地気の流路、方向などが加えられて複雑な技法として成立する。これが死者の陰宅（墓室）だけではなく、生きるものの陽宅に及ぶ。¹¹

ここでは人体の中に流れる気の相似形として、大地にも気が流れると考えられたと理解されている。

堪輿の詳しい解説は措くとして、大地中の気の流れる経路を龍脈と称し、龍脈の本流や太い支流、さらに人体のツボと同様に気が滞溜する局という地を最上の土地とし、これを探す技術を風水術・堪輿などと称する。これによって、墓地だけではなく、住宅や都城の建設にも大きな影響をあたえるようになる。しかし、地気や龍脈というのは全くの架空の存在であり、地を掘って確認し得るものではない。そのための目安の地形が、北方に高い山が控え、南は広くひらけて水流や湖沼がある土地として伝えられる。さらにいえば、景色の優れた地であり、肥沃な土

⁹ 前掲牧尾 7-8 頁。

¹⁰ 前掲牧尾 8 頁。

¹¹ 「中国思想の環境論 —自然・山水・風水—」山田利明著…「エコ・フィロソフィ」研究 第 1 号, 2007., 7 頁。

地ということになる。ここまで条件を充たせば、風水説によらなくても、墓地や住宅の適地であることは、誰の目から見ても明らかであろう¹²。

山田氏のこの論は興味ぶかい。とくに「地気や龍脈というのは全くの架空の存在であり、地を掘って確認し得るものではない」の部分である。中国医学の経絡説は、経絡の存在が完全には証明されてはいないが、鍼灸は実際に効果があることから、気の流れはあると認識されている。

地気や龍脈というのは、人体という小宇宙を大地の上に展開させて得られたものであろう。地下には伏流水があり断層などもある。そのため「全くの架空の存在」というのは、言い過ぎかもしれない。ただし、実際に地を掘って、地脈の流れを確認してできた図ではないこともまた明かである。中国のさまざまなものは、医学にしても風水にしても、理論が重視される傾向があり、時にそれが先行する観がある。枠組みをつくり体系化がすすみ、そのあと、細部にわたる分類がなされていくことが多いのである。

医学の場合は、気が滞ることは、好ましくないことである。また気は循環している。ところが風水では、むしろ、気を必要とする場所にとどめて、その気をそこに取り込もうとするのである。

・朝鮮

野崎充彦氏は、「朝鮮断脈説の形成について¹³」という論文の中で、

李朝後期の著名な士大夫である李重煥(一六九〇～一七六五年?)が著した『扨里誌』は、朝鮮士大夫の理想の住居を求めた書として夙に名高い。それは、三十年にわたる李重煥自身の放浪生活と、彼が親しんだ風水思想が反映された異色の地理書であり、その慶尚道篇青山の条には次のような記述がある。一善山は…尤も清明穎秀、故に諺に曰く、朝鮮人の才の半ばは嶺南にあり。嶺南人の才の半ばは一善(善山一筆者注。以下同じ)にあり。故に旧より文学の士多し。壬辰のとき(壬辰倭乱即ち秀吉の朝鮮侵略のこと)、天将(中国の將軍)のここを過ぐるあり。術士、外国の多才なるを忌み、兵卒をして邑後の脈を断たしめ、熾炭もてこれに灸し、且つ大鉄釘を挿し壓し往く。これより人才衰爾して出でず¹⁴。

と紹介する。

この話は、壬辰倭乱(1592¹⁵)という豊臣秀吉の朝鮮侵略と、朝鮮を救援しようとした中国の將軍と

12 同上。

13 http://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/infolib/user_contents/kiyo/DB00000279.pdf
「朝鮮断脈説の形成について」野崎充彦著、-- 人文研究 48(1), 1996., 1-25 頁。

14 2 頁。

15 日本で「文禄・慶長の役」と呼んでいる「文禄」の役が始まった時の干支。

が、からみあった、やや複雑な構成となっている。

朝鮮の慶尚道には、人才を排出する善山という清明穎秀¹⁶な地がある。人材は、この地から輩出していたのだが、その理由は風水がよいことにある。朝鮮を救援にきた中国人の將軍に同行していた術士(風水のことがわかる)が、その地が風水にすぐれていることを見抜き、外国(朝鮮)に多才な人材が多くなりすぎることを忌み、風水を悪くするための方策を講じた。中国は、朝鮮を救援に来たのだが、朝鮮に多才な人士が輩出しすぎることを恐れたということになる。

そしてそれを阻止するための方策として、地脈を断つために熾^{おこ}った炭で灸をし、大きな鉄釘を挿したという。その結果、その地では人材が枯渇したという。

この話で、興味ぶかいのは、風水説が中国だけでなく朝鮮にも伝わっているということ。また人体に行う鍼灸を想起させる表現がみえることである。

地脈という大地の中を流れているようにみえる脈があり、その流れは熾^{おこ}った炭の灸や鉄釘(の鍼?)で阻止できるという。「灸」という語がみえるため、相対的にここの釘は「鍼」ということになるだろう。これは鍼灸である。一般に鍼灸は人体の気の流れをよくするために行うものである。だが「熾^{おこ}った炭の灸」と「大きな鉄釘の鍼」という、かりに人体に行うとすれば、経穴を破壊し、経絡の流れを阻害してしまいそうな処置を行うことによって、地脈の流れを断ち切ったということになる。中国医学では、経穴と急所が一致している場合があり、それはまた武術の活法、殺法にも通じるが、ここではそういった観点はない。異常な「灸」と異常な「鍼」を用いて、地脈を断ち切っているのである。

野崎はまた、

日本統治下の植民地朝鮮にも、鉄道や道路付設にまつわる同様の断脈説のあったことはよく知られている¹⁷。

という。

日本人が朝鮮を植民化したときに風水の気の流れを遮断するためにさまざまなことをしたというのが、ひろく信じられているという。

地脈を断つことを断脈説という。中国にも、秦の武将、蒙恬の話の中に、「遼東に城塹^{じょうざん}すること萬餘里、此れ其の中に地脈を絶つ無きこと能はざらんや¹⁸」と、地脈を絶つという言い方がみえる。蒙恬は匈奴を追い払い、万里の長城を築造したことで、有名な將軍である。「城塹^{じょうざん}」は「城(長城)の濠^{ほり}」ということであろう。しかし、そのこと自体は、それほど展開していない。むしろ、韓国で発達したものとされている。

16 穎は、秀でるの意味。「穎秀」は「才智がすぐれる(白川静『字通』平凡社)」とされている。

17 前掲「朝鮮断脈説の形成について」。

18 遼東城塹萬餘里、此其中不能無絶地脈哉。『史記』卷八十八、蒙恬列傳第二十八

しかし、それらの話のとは、

…このような文脈(道教→風水)があったればこそ可能だったのだ。道教における壓(厭)勝術と中国との外交的軋轢、それに加え、未曾有の国難であった壬辰倭乱を経て、断脈説が形成されていったのである¹⁹。

と、ベースは中国の風水の流れのもとにあるという。

・沖縄

日本における風水の流行は沖縄の風水の研究から始まっている。沖縄に中国の影響が大きいからであろう。渡辺欣雄氏の『風水思想と東アジア』(1990)は、沖縄の風水に触れている。このあたりから日本に風水ブームが起こり、その火つけ役ともなった。時間の関係で詳しい内容は省略する。

二、洞天福地

道教の聖地といってもよいだろう。基本的に洞窟がイメージされているが、それは同時に山ともつながっていて、山にある洞窟ということになる。唐代になって、十大洞天、三十六小洞天、七十二福地というように分類されている。福地という言葉には、洞窟のイメージはないが、実際には洞窟をもつ福地もある。洞天福地のさきがけとなる書物には、この山のあと、別の山に行くといった順番のようなものが記されていて、四国の八十八箇所めぐりのようになる可能性はあった。

しかし、十大洞天などの分類には、そのような順序は想定されていない。以下に十大洞天の名前とその場所を記した表を掲げる。

・十大洞天

	洞名	天名	周廻	廣	羣仙統治	州	縣	備考
								※上段司馬承禎『天地宮府圖』 十大洞天 太上曰十大洞天者 處天地名山之間是 上天遣之所
								※下段杜光庭『洞天 福地嶽瀆名山記』

19 18 頁。この内容は、『韓国の風水師たち：今よみがえる龍脈』野崎充彦著。— 人文書院, 1994, 152 頁に詳しい。

第一	王屋山洞	小有清虛之天	周迴萬里		屬西城王君治之	洛陽河陽兩界去王屋縣六十里		※『紫陽真人内傳』、陶弘景撰『周氏冥通記[0312]』卷之四に王屋山
	王屋洞	小有清虛天	周迴萬里		五褒所理	五褒所理	王屋縣	
第二	委羽山洞	大有空明之天	周迴萬里		青童君治之	台州黃巖縣去縣三十里		※『紫陽真人内傳』に青眞小童君、『眞誥』卷之六に「方諸青童君」
	委羽洞	大有虛明天	周迴萬里		司馬季主所理	武州		※『紫陽真人内傳』、『眞誥』卷之五に司馬季主、『洞玄靈寶眞靈位業圖[0166]』の第三中位の右位にも司馬季主
第三	西城山洞	太玄惣真之天	周迴三千里		是屬上宰王君治之			未詳在所、登真隱訣云、疑終南太一山
	西城洞	太玄總真天	周迴三千里		王方平所理	蜀州		
第四	西玄山洞	三元極真洞天	周迴三千里					恐非人跡所及、莫知其所在
	西玄洞	西玄洞		廣二千里	裴君所理	金州		
第五	青城山洞	寶仙九室之洞天	周迴二千里		屬青城丈人治之	蜀州	青城縣	
	青城洞	寶仙九室天		廣二千里	甯真君所理	蜀州	青城縣	
第六	赤城山洞	上清玉平之洞天	周迴三百里		屬玄洲仙伯治之	台州	唐興縣	※『周氏冥通記』卷之一に赤城
	赤城洞	上玉清平天		廣八百里	王君所理	台州	唐興縣	
第七	羅浮山洞	朱明曜真之洞天	周迴五百里		屬青精先生治之	循州	博羅縣	
	羅浮洞	朱明曜真天		廣一千里	葛洪所理	修州	博羅縣	
第八	句曲山洞	金壇華陽之洞天	周迴一百五十里		屬紫陽真人治之	潤州	句容縣	※『眞誥』卷之十一稽神樞、『洞玄靈寶眞靈位業圖』、『周氏冥通記』卷之三に句曲山
	句曲洞	金壇華陽天		廣百五十里	茅君所理	潤州	句容縣	

第九	林屋山洞	林屋山洞	周廻四 百里		屬北嶽真 人治之			在洞庭湖口 ※洞玄靈寶真靈位 業圖[0166]『周氏冥 通記』卷之三に林屋 山
	林屋洞	左神幽墟天		廣四百里	龍威丈人 所理	蘇州	吳縣	
第十	括蒼山洞	成德隱玄之 洞天	周廻三 百里		屬北海公 洵子治之	處州	樂安縣	※『洞玄靈寶真靈位 業圖』に括蒼
	括蒼洞	成德隱真天		廣三百里	平仲節所 理	在台州		

※三十六小洞天と七十二福地は省略した。

三、齊雲山の洞天福地と風水

ここでは2014年11月に訪れた安徽省、黄山の近くの齊雲山（586メートル）を紹介したい。唐代の司馬承禎（643-745）および杜光庭（850-933）が説いた十大洞天・三十六小洞天・七十二福地は有名である。しかし、そこには齊雲山は入っていない。唐代には、注目される場所ではなかったであろう。ここには張三豊（1247-?）の墓がある。かれは明代の道士である。現代では齊雲山は道教の聖地、四大名山の一つとされている。そして洞天福地という標識（図版1）も掲げられている。

実際にこの地を訪れてみると、そのことは十分、納得がいく。明、唐寅（1470-1524）の碑「紫雨肖宮玄帝碑」等の石碑がある山道を登りつめると、山がアーチのようになっている（図版2）。そこをぬけると一気に視界がひろがる（図版3）。すぐ下方は三方を山に囲まれた、すり鉢のようになっており、その中心には太極図のような円形の文様が描かれている（図版4）。さらに下方には池がみえる（図版5）。太極図の中心に立つとあたかも周囲の気が、そこに集まり、体中に気がみちてくるような感覚におちいる（図版6）。そこには小さな洞窟（図版7）があり、雨君洞・玄芝洞などと名づけられていた（図版8）。そこには道教の神が祀られていた（図版9）。このような景色は、どこにでもあるわけではない。風水の観点からみてもすばらしい場所なのであろう。

四、風水と洞天福地をつなぐもの

『道教風水学²⁰』では、第二章 道教文献考査で、一、道蔵内の風水文献 二、蔵外道教風水文献の項目をたて、道教と風水の親近性を探っている。また第三章 道教風水学之特徴与要則では、二、

20 参考文献参照。



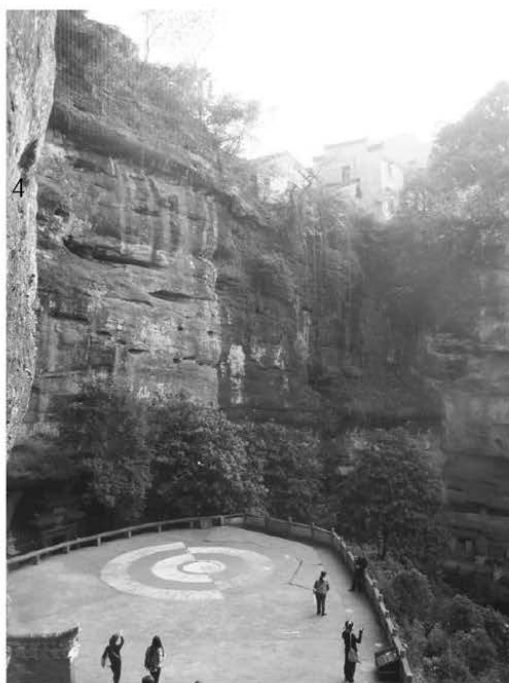
1 洞天福地遺址の標識



2 石碑の立つ場所から
アーチをぬける



3 視界がひろがり、異なる
景色があらわれる



4 下方にすり鉢状の開けた場所がみえ、中心に太極図
がえがかれる



5 さらに下方に池がみえる



6 太極図の中心で気をあつ
めるポーズをとる女性



7 洞窟がみえる



8 雨君洞 玄芝洞



9 神像

道教風水学的仙家性の2.道教風水学与洞天福地勝境という項目をたてて、風水と洞天福地が関連すると述べている。

また陶弘景『真誥』巻十一の以下の文章を参考としてあげている。

句曲洞天、東のかた林屋に通じ、北のかた岱宗に通じ、西のかた峨眉に通じ、南のかた羅浮に通ず、皆な大道なり。其の間、小径雜路有るも、阡陌抄會すること、非一處に非ざるなり。漢の建安（196-219）の中、左元放傳者の云うを聞く、「江東に有此の神山有り」と。故に江を度（わた）り之れを尋ぬ。遂に齋戒し、三月乃ち山に登り、乃ち其の門を得、入洞虚、陰宮を造る。三君も亦た授くるに神芝三種を以てす。元放、洞宮の内を周旋す。年を経るも、宮室結構方円整い、肅たること甚だ惋懼なり。図らざりき天下復た此の如きの異有るか。神靈往来し、生死を相い推校すること、地上の官家の如し。²¹（『真誥』巻十一）

ここでは、句曲洞天が中心にあり、東は林屋洞天、北は岱宗すなわち泰山、西は峨眉山、南は羅浮山に通じている、という。泰山が三十六小洞天である以外、他はいずれものちに十大洞天に入れられている。それらは、大道を通じて、つながっているという。この「道」は、地上の道路と解してもよさそうだが、洞天の性格を考えると、地下の洞窟のような通路と考えることも可能であろう。中心と四方というのは、のちに崑崙山に発すると考えられた龍脈とは異なるものの、崑崙の位置が句曲に移動したと考えれば、よく似た構造となる。ただ、気が句曲から発しているというわけではない。ネットワークの通路というイメージである。

洞天はとくに流れを意識しているわけではないため、風水の方が人体の経絡に近いかもしれない。流れが意識されると、朝鮮の断脈説のような理論が現れるのであろう。

おわりに

風水の起源を地相と考えれば、堪輿などが当てはまり、洞天福地よりも古い。ただ、現在の風水思想に直接、つながるものといえば、宋代あたりに郭璞に仮託されて作られた『葬書』あたりとなるだろう。この風水は、地脈である龍脈と祖先の埋葬と生者の利益とをむすびつける功利的なものであった。陰宅風水であるが、地形としては、よい気のあつまる場所が想定されている。これは生者にとっても気持ちのよい場所であり、陽宅風水と陰宅風水の基本的な原理は共通するように思われる。

洞天福地は、神仙が棲む場所として構想され、洞窟があることが、一応の基本となっている。地下をも含んだ理想的な場所である。ここには龍脈のようなものは、想定されていないが、それぞれの洞

21 句曲洞天、東通林屋、北通岱宗、西通峨眉、南通羅浮、皆大道也。其間有小径雜路、阡陌抄會、非一處也。漢建安（196-219）之中、左元放聞傳者云、江東有此神山、故度江尋之。遂齋戒、三月乃登山、乃得其門、入洞虚、造陰宮。三君亦授以神芝三種。元放周旋洞宮之内。經年、宮室結構方円整、肅甚惋懼也。不図天下復有如此之異乎。神靈往来相推校生死、如地上之官家矣。

天が地下でつながったネットワークのようなもの示唆する話もある。

出発点の異なる「風水」と「洞天福地」は、同じではないものの、大地を流れる気と、大地の下のネットワークのようなものという考え方には似たところがある。また風水の術士と道士は重なりあう場合がある。そのため、「はじめに」で述べたように、現在の道士はかなり風水を気にしているのである。中国の大地には、熱風の吹きすさぶ砂漠のようなイメージはない。その大地を流れる気はプラスイメージである。風水も洞天福地もそれらの気を取り込もうとするのであろう。

写真紹介でみた齊雲山は伝統的な洞天福地には含まれていないが、十分にその資格を有する場所であらう。山に囲まれた中心、八卦のマークが描かれたその場所に立てば、大地の気が、その一点に凝集しているという感覚をもつのである。

※拙稿は、2015年3月17日に東洋大学白山キャンパスで行われた東洋大学 TIEPh 主催シンポジウム「大地の思想——風水・聖地・里山——」の発表原稿「中国の風水思想と洞天福地」に加筆修正したものである。

参考文献

風水関係

- ・『術の思想：医・長生・呪・交霊・風水』三浦國雄編。-- 風響社, 2013.
- ・『風水思想を儒学する』水口拓寿著。-- 風響社, 2007. -- (ブックレット《アジアを学ぼう》；3).
- ・『風水という名の環境学：気の流れる大地』上田信著。-- 農山漁村文化協会, 2007. -- (図説・中国文化百華；015).
- ・「中国思想の環境論 —自然・山水・風水—」山田利明著.「エコ・フィロソフィ」研究 第1号, 2007.
- ・『風水講義』三浦國雄著。-- 文藝春秋, 2006. -- (文春新書；488).
- ・「傳郭璞『葬書』の成立と變容」宮崎順子著。-- 日本中国学会報 58, 2006.
- ・『尋龍点穴：中国古代堪輿術』王玉徳著。-- 中国電影出版社, 2005.
- ・『風水・暦・陰陽師：中国文化の辺縁としての沖縄』三浦國雄著。-- 榕樹書林, 2005. -- (琉球弧叢書；10).
- ・『朝鮮の風水』朝鮮総督府編著；上, 下。-- 復刻版。-- 龍溪書舎, 2003. -- (韓国併合史研究資料；41).
- ・『風水の社会人類学：中国とその周辺比較』渡邊欣雄著。-- 風響社, 2001.
- ・『風水と身体：中国古代のエコロジー』加納喜光著。-- 大修館書店, 2001. -- (あじあブックス；034).
- ・『大地は生きている：中国風水の思想と実践』聶莉莉, 韓敏, 曾士才, 西澤治彦編著。-- てらいんく, 2000.
- ・『中国風水羅盤』程建军著。-- 江西科学技术出版社, 1999.
- ・『韓国の風水思想』崔昌祚著；金在浩, 渋谷鎮明共訳。-- 人文書院, 1997.

- ・『族譜：華南漢族の宗族・風水・移住』瀬川昌久著。-- 風響社, 1996.
- ・『中国古代風水と建築選址』一丁[ほか]. -- 河北科学技术出版社, 1996.
- ・『風水：中国人民の環境』劉沛林著。-- 生活・讀書・新知上海三聯書店, 1995. -- (中華本土文化叢書).
- ・『風水探源：中国風水の歴史と実際』何曉昕著；宮崎順子訳。-- 人文書院, 1995.
- ・『風水気の景觀地理学』渡辺欣雄著。-- 人文書院, 1994.
- ・『風水論集』渡辺欣雄, 三浦國雄編。-- 凱風社, 1994. -- (環中国海の民俗と文化；4).
- ・『風水思想論考』牧尾良海著。-- 山喜房仏書林, 1994.
- ・『道教風水學』詹石窗著。-- 文津出版社, 1994. -- (道教文化叢書；3).
- ・『韓国の風水師たち：今よみがえる龍脈』野崎充彦著。-- 人文書院, 1994.
- ・『風水思想と東アジア』渡辺欣雄著。-- 人文書院, 1990.
- ・『沖縄の風水』窪徳忠編。-- 平河出版社, 1990.
- ・『風水：中國的方位藝術』羅絲巴哈著；李煥明譯註。-- 明文書局, 1988.
- ・『中国人のトポス：洞窟・風水・壺中天』三浦國雄著。-- 平凡社, 1988. -- (平凡社選書；127).
- ・『中国の風水思想：古代地相術のパラード』J.J.M.デ・ホロート著；牧尾良海訳。-- 第一書房, 1986.
- ・『風水：地靈人傑の思想』デ・ホロート原著；牧尾良海訳・註。-- 大正大学出版部, 1977.
- ・『金寄靖水の風水学校』金寄靖水著。-- 祥伝社, 2004.

洞天福地

- ・拙稿「洞天における山と洞穴—委羽山を例として—」『洞天福地研究』1号、好文出版、2011.4、10-30頁
 - ・拙稿「第二洞天委羽山探訪記」『洞天福地研究』1号、好文出版、2011.4、81-96頁
 - ・拙稿「華山と洞天—大上方を中心として—」『洞天福地研究』2号、好文出版、2012.2、10-30頁
 - ・拙稿「増補仙穴考」『洞天福地研究』3号、好文出版、2012.3、66-82頁
- その他『洞天福地研究』1～5号の論文など。